

優秀賞

二つの言葉

岩手県盛岡市立高等学校二年 吉田 琴美

「下を見るんじゃない、上を見る。」

「人の人生は背中にある。」

両親からももらったこの二つの言葉は、私にとっては自分を奮いたたせる為の言葉の贈りものです。

私は生まれつき耳が聞こえず、「感音性難聴」という障害を持っています。

簡単に言うと、友達の声や先生、両親の声が聞こえない、風の音や自動車の音などみんながあたり前のように聞いている日常的に発せられる全ての音が全く聞こえない、音の無い世界で生きているという感覚です。

今、私は両耳に補聴器をつけています。補聴器を装着したといっても全てが聞きとれる訳でもなく、口の動きを見て読みとった言葉を認知しているという単なる装置にしかすぎないのです。

私は二歳の頃から聾学校という耳が聞こえない人達が言葉話すための発音の訓練や、口を見て言葉を読みとる口話の訓練をする所に通って勉強してきました。

小学校から今までは普通学校に通ってました。

しかし、まわりの人達は聞こえる人達だけしかいなかったたので、自分の耳に対するコンプレックスをすごく気にしていました。

授業の時、先生が黒板を見ながら話すので、話が聞きとれない、口を見て必死に聞きとろうとしても分からない。勉強の内容が分からず、みんなに遅れないようについていくのも必死でした。

友達と居ても、友達の言った冗談が分からない、なぜ笑っているのか分からない。後から教

えてもらっても一緒に共有できない、ということもたくさんありました。

「何で私だけだろう。耳が聞こえていたら。」という想いがいつもあり、自分が普通の人達と一緒に出来るといふ自信が持てず、自分だけ何も出来ない、自分だけみんなに取り残されている、ついていけないという気持ちがある中で何度も何度もうずまいていつも自己嫌悪に陥っていました。

学習の方でも先生の話聞いてノートをとる、それを理解することも精一杯で普通の人よりも何倍も神経を使わなければならぬので、学習内容についていけない時期があり、テストも思うように点数がとれず、自分が思い通りにならない悔しさと情けなさから学習に対して無気力になり、全てにおいて投げやりになっていました。

この事を家族に話した時、話を聞いた父が、「下を見ようとするな。上を見る。」と言いました。

「下を見ようとするな、まずは自分に自信がなくなってしまう。だから上を見て上にいる者を目指して上へ上へあがっていけ。」

という言葉でした。

私は自分の中にある上を目指すための目標や目的が今まで持っていなかったのではないかと気付かされました。

また、私は背中を少し曲げ、猫背になって歩くくせがありました。母は私が勉強や友達関係など様々な葛藤から逃げたくなっているのに気付き、言いました。

「自信を持ち、背中を丸めて生きるんじゃない。今まで自分に自信がなく、小さくなって背中が

丸くなってきたんだよ。人の人生は背中であり。背中をのばして、背中をのばして。耳が聞こえなくなったら出て来るようになればいいから。」

母は力強くそして優しく言ってくれました。

この二つの言葉を聞いた時、涙が止まらずずっと泣いてしまいました。

この二つの言葉は私を変えてくれた魔法の言葉です。

今も、何か苦しいことや辛いことがあると、この言葉が自分を励ましてくれます。

焦らず、遅くてもいいからゆっくり、出来ないことがあれば出来るようになっていけばいいと思えるようになりました。

他は他、自分は自分、という考えを持ち、まわりの人に流されない人になるためにも前向きに、人に感謝する心をこれからも忘れずに、しっかり前へ進み、下を見ず背をのばして生きていきたい。